TOKAI WAKASHACHI

わかしゃち

第3号　1998・4
土佐中・高同窓会・東海支部会報
編集人／35回生　内田順子
〒460−0024　名古屋市中区正木3丁目13−13　コスモホーム　気付
TEL　052−332−3370
FAX　052−332−3372

われら東海　元気です

昨年十二月六日（土）、ちょっと早い忘年会として、同窓生二十名ほどが集まった。写真のように、〈みんなテカテカ〉と元気である。久しぶりの土佐料理、土佐弁が飛びかう土佐人らしい〈いざり〉の宴であった。

肴は〈野球〉である。

あの甲子園のサイクルヒット男・五十二回生玉川寿さんが、名古屋に転勤でこの会に出席されていた。

「あのシングルヒットは、実は、相手一塁手のエラーであった」

という彼の〈秘話〉はおもしろかった。

「だけんどしかし、その後の土佐高野球は、どうもぱっとせん。なんとか今世紀中（あと三年だが）に、もう一度、甲子園での大活躍を応援したい」

というのが、出席OBの声。

「まっこと、あのころが懐かしい……」

と、それぞれがスター玉川とのツーショット写真に納まって、散会となった。

平和であったが不景気が続く、東海支部の平成九年は終わった。

学校だより

学校長　森田　幸雄

全国に先駆けての桜前線上陸とともに、土佐路はやがて爛漫の春一色に包まれようとしております。

本校もこの花便りに合わせたような三月二十日の中学校卒業式で、本年度公式行事が総て終了いたします。これも日頃の先輩諸兄姉のご声援の賜と、心から感謝申しあげます。

卒業式と申せば、去る一月二十一日、第七十三回高校卒業式が、新同窓会長岡村甫さんご列席のもと、盛大かつ厳粛に挙行されました。二百九十三名の新会員の誕生です。先輩各位の暖かいご指導・ご激励のほど、お願い申しあげます。

なおほとんどの者が大学入試挑戦中ですが、貴地関係では、愛知医大・愛知学院・中京・名城・南山の各大学、国公立では名古屋大・市立大などから合格の朗報が入りつつあり、今後を期待しているところです。彼らが入学の暁には、なにかとお引き立てを賜りますよう希う次第であります。『わかしゃち』第三号の発刊をお喜び申しあげ、あわせて貴支部のご発展をお祈り申しあげます。

（平成十年三月十二日）

付記

このたび、四十数年にわたり教育振興に尽力された松尾功禄教頭が退職されます。貴支部総会へ出席させていただいたこともあり、一言ご挨拶を述べさせていただきます。

教頭　松尾　功禄

『わかしゃち』第三号の刊行おめでとうございます。東海支部へは二度出席させていただきました。

最初当地は初めてでしたので、支部長さん・事務局長さんのご案内、とても嬉しく、また皆さんの暖かいお迎え忘れられません。

さて私事、昭和三十年土佐校へ赴任してから四十三年、いま退職するにあたり、多々感慨深いものがあります。数学を教えることと、生徒との熱い関わりと、いくつかの理想の実現が生き甲斐でした。優秀な生徒と、すばらしい先輩をもつ本校に奉職できたことは、とても誇りに思い幸せでした。

ただ長いだけで、何のお役にも立てなかったことを申し訳なく思っております。

これからも土佐校が、誰からも親しまれ、信頼され、尊敬され、いつも暖かく迎えてくれる学校でありますよう、心からお祈りいたします。

関東支部だより

事務局　四十一回生　鶴和　千秋

東海支部の皆様、こんにちは。この冬の関東は、暖冬の影響で雪が多いという、凡人には理解しがたい天候が続いております。

『わかしゃち』編集部の皆様のハイペースに、第二号でのご報告以後、これといった報告事項もなく、空気と景気の冷え込みの中、ひたすら春を待っている関東支部事務局の今日この頃です。

今年の大学入試戦線も一段落といったところです。本紙が発行される頃には、母校よりの結果報告も届き、ああだこうだとおっかない先輩諸氏からの議論も百出していることでしょう。春爛漫の結果であることを祈っております。

関東支部では、本年五月二十三日（土）に恒例の支部総会を、渋谷区代々木の《オリンピック記念青少年総合センター》で開催いたします。

今年は、〈答えいっぱつカシオミニ〉の考案者として名高いカシオ計算器（株）の羽方将之氏（三十八回生）にお願いしております。永く最先端企業の第一線で活躍されてきたビジネスマンとしての体験を通しての、興味深いお話をお聞かせいただけるものと期待しております。

三十八回～六十八回の、八の回生による懇親会の企画と運営も、斬新なアイデアとセンスで準備が進められております。ご期待ください。

さて、母校もいよいよインターネットに繋がり、高度情報化社会への小さな一歩を踏み出したやに聞き及びます。これがひとつのキッカケとなって、先生方や後輩生徒諸君がおおいに活性化し、一部からの沈滞気味との評を吹き飛ばす勢いを示していただければ、関与したOB諸氏も、本懐この上ないことと思われます。

はるか阪東の地より、母校ならびに東海支部の皆様の、ますますのご発展をお祈りいたしております。

同窓会あちこち

本部だより

幹事長　三十四回生　岡内　紀雄

東海支部のみなさん、お元気ですか。

世の中、政治・経済ともに混迷し、不景気風が吹いていますが、そのような中にあって、二十一世紀に向けた県勢浮揚を目指す高知県では、インフラの整備が進んでいて、高知新港は三月二十六日に一部開港し、青島とともに釜山との定期航路にコンテナ船が就航します。また、自動車道の延伸は、南国・伊野間が三月二十日開通、合わせて高知市内からのアクセス道路も順次完成をみています。

ご当地では、中部国際空港の計画が動きだすなど、明るい未来が展望され、たいへん喜ばしいことと思います。

同窓会本部では、昨年夏の総会で新しい体制となり、初回のミーティングでの意見交換で、総会を母校で開催してはどうかとの提案があり、現在検討中であります。

それと、これからの総会では議案審議等は極力省いて、会員の親睦に重点をおいた時間設定とするため、会則の改正準備を進めています。

また、これは母校と振興会と同窓会の共同事業になりますが、同窓生の中からユニークな活動や生きざまをしている方々を紹介する小冊子『土佐中・高卒業生の群像』（仮称）の作成にとりかかっています。

なお、今年の総会は八月八日（土）に開催の予定です。東海支部のみなさんのご参加をお待ちしています。

関西支部だより

支部長　二十九回生　永野　一元玄

東海支部会員の皆さまにはご健勝にてご活躍のことと存じます。平素より何かとご支援を賜りましてありがとうございます。

関西支部はこのたび事務局を変更しました。これまで永年に亘って、事務局の仕事を司っていただいてきた竹原さん（二十八回生）に代わって三十一回生の木下章夫さんにご協力いただくことになり、今年に入ってから事務を始めてもらっています。また、幹事長の交代もありました。関口さん（四十一回生）がお仕事の都合で繁忙のため、四十二回生の竹下和夫さんが就任しました。今後ともよろしくお願いします。

本年は支部総会を去る一月三十一日（土）、グランヴィアホテル大阪にて開催しました。今回は百二十五名出席の

もと、盛会のうちに終えることができました。

東海支部からは竹原副幹事長殿に、わざわざご参会いただきました。当日が母校の卒業式と重なったため、学校からの参会はかなわなかったですが、同窓会本部ほか各支部よりご参加いただきました。懇親会のほか、竹原前事務局長への感謝状贈呈や、会則についてのお知らせや、四十一回生の鎌田さんほかの肝煎りによる土佐中・高ホームページ（インターネット）の実演をやっていただき、同窓会員交流拡大のためのメディア紹介をしてもらいました。今年はこのほか年央に『なんぷう』発刊を予定しています。

関西支部の新事務局
〒542・0081　大阪市中央区南船場3・12・12心斎橋プラザビル十一階
（株）木下真珠内
TEL06・243・0201
FAX06・243・0205

香川支部だより

事務局　四十回生　熊野　貴麿

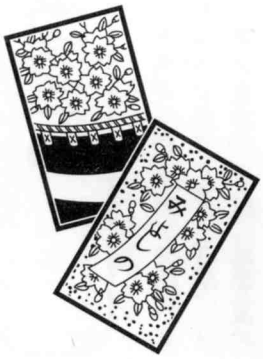
一昨年に香川支部が復活して、香川県在住者の集いを、なんとか二回、開催できました。二回とも、ウィークデーに催したため、十八時半の開始時刻に、都合を合わせやすい方々が足を運んでくださるという結果になってしまったと、少し反省もあります。

香川県に居住していることも、高知の土佐高をともに巣立ってきたことも、ひとつのご縁ならば、《袖すり合うも多生の縁》の言葉のように、なんらかの機会に、〈縁〉を復活させるのも、また新たな世界が広がることにつながるのではないか、と考えるこのごろです。

二十世紀も残りわずかになり、生活や社会が、そして世界が大きく変化しようとしています。だからこそ、助け合い、情報を交換し、より良い選択をしていきたいとの思いがあります。

香川県は、大阪府についで二番目に狭い面積しか保有していませんが、東讃・中讃・西讃と呼ばれる、三つのエリアに分かれています。中讃地域の方は、比較的出席しやすいでしょうが、東讃・西讃地域の方々にも、年に一度の母校の集いに出ていただけるように、開催三回目となる今年は、七月の土曜か日曜の開催を検討しています。

五年ごとの同窓会員名簿には、地球上に在住する同窓生の行方が、凝縮された情報として載っています。最新の情報は、各地の支部が、会員のフレンドシップの鎖として機能できれば、活動はより活性化の方向に、ポジションを転換できると考えています。



広島支部だより

事務局　三十七回生　小島　康

霞棚引き朧姿の宮島の対岸から活動報告をいたします。一月二十四日、当地では珍しい雪景色の中、ガーデンパレスホテルにて、広島支部十周年記念総会交流懇親会を開催しました。

本部各支部からの出席者の皆様から、お祝辞と激励のお言葉を頂戴し、役員一同、さらなる発展のために精励努力すべく、決意を新たにしました。

総会では、以下のことを決議しました。

①支部発足以来おもにコピーワークを一手に引き受け、支部運営の強力な推進力となってくださった西岡恒憲氏（四十一回）の転出に伴う欠員補充として、会計を中山和敏氏（四十回）とする。

②参加者の間では毎回好評ではあるが出席者の少ない《夏

の集い》を取り止め、毎月第三木曜日アフターファイブに自由参加の形で、〈梅太郎〉にてその名も《青春の集い》を持つ。（早速二月十九日の第一回目には十名参加）

③総会懇親会の同伴者の範囲は、出席会員一名につき、家族または同窓会事務に携わった者一名とする。

④平成十一年の総会は、一月二十三日（土）とする。

出席者は四十名。香川支部からは初めての参加者をお迎えしました。四十一回生は、インターネットの威力で、七名の参加。すばらしいの一言です。六十八回生と七十一回生の若い会員の出席は久々のことで、たいへん嬉しく、このチャンスを捉えて、長年の課題であった〈若年層会員の参加〉に繋げていけたらと思います。

記念講演は、現場で技術者として実践し、それを学問的に裏付け、去年河川法を改定にまで漕ぎ着けられた福留脩文氏（三十七回）。

テーマは《歴史と空間を次代に継ぐ　全国各地の川や橋や石垣》。高知城の石垣と階段、みませの風景、四万十川の沈下橋、菜園場町の四ツ橋など、懐かしき土佐の風景をスライドで見せながらの講演は、九十分を退屈させない迫力がありました。

交流懇親会での広島支部名物の〈三分間スピーチ〉は、皆様、心に残るお話をしてくださいました。

なかでも、広島支部名誉会員の竹村照雄先輩（二十回）が、以前弁護をした青年が、自伝的小説を出版し、その最終章に、先輩と青年との出会い、接見のようす、法廷での裁判官・被告・弁護士の絡みなどが書かれていて、若者との心の交流がこよなく嬉しいと報告されました。

妹尾加代氏（三十五回）は「土佐高の同窓会に出席すると、みんなが燃ゆる思いを持って生きているので、力が沸きます。福留さんと竹村先輩のお話を聞いて、諦めてはだめだ自分にも出来ることがある、やらないといけないことがある、と思って勇気が出ました」

と結ばれ、両氏とも、会場は拍手喝采でした。

お便り募集！

次号の『わかしゃち』に掲載します。たとえば、

同窓生の消息
求人求職
花嫁花婿募集
美味推薦
文化活動案内

伝言板

中部を歩きませんか！

二十八回生　松崎　正雄

名古屋へ移住してきたみなさん、電車で郊外へ出かけ、旧街道や峠道を、自分の足二本を頼りに、気楽に健康的な余暇を過ごしませんか。

春は山里にひっそり咲き乱れる桜の巨木に感嘆し、夏は涼を求めて中央線で北上すること二時間余、旧奈良井宿から太平洋と日本海との分水嶺の鳥居峠（標高千二百メートル）を越える爽快感。秋は山深い木曽谷の見事な紅葉を愛で、冬は暖かい渥美半島の太平洋岸を土佐の黒潮に思いを馳せながら、一路、伊良湖岬へ。

日帰り圏で十五～二十キロ（はりまやばしから野市・赤岡あたり）ほど歩いて、道中買い込んだ地酒を、帰りの車内で一杯呑むのも、また、格別です。

五名ぐらい集まってもらえば、これまでの経験を生かして、二か月に一回ていど、自前のルートで実施したいと思います。

連絡先　名古屋市国際展示場
三九八・一七七一
松崎正雄自宅
七九一・二〇八三

私の履歴書

三十一回生　久保　徳子

伊勢湾台風の翌年、名古屋へ出てきた。東区赤萩の知人宅にひと月ほど下宿。山口町の小さな喫茶店の小二の女の子の家庭教師になって、本宅の新出来町に移る。立派な邸宅に驚く。十畳ほどの和室。荷物といっても、身の回りの物とラジオ・レコードプレーヤーくらい。今から思うと天国だった。

家庭教師料を貰い、食費も部屋代も要らず、高知で三年勤めた失業保険を受給。リッチな半年間を呑気に過ごす。当時、私は自転車を愛用した。北区押切町にあった職安まで週一度、失業保険を貰いに行くにも自転車。納屋橋のヘラルド映画館に知人がいて顔パスがきくので、封切ごとに無料で洋画を見にいく。広小路通りの車道を、堂々と自転車で行ったものだ。

その後、平田町（へいでんちょう）近くにあった英文タイプの学校に入り、一年間寮生活を送る。卒業式の際、なぜか（たぶん最年長のため）総代に選ばれ、証書を手にしたものの、式直後、なにかの費用が未納だからとのことで今だに預けっぱなしである。就職し三年間勤務。退社。結婚。夫の転勤で大阪へ。三年の間に、娘二人誕生。金沢へ転勤。七年余の金沢生活を満喫。長男誕生後六か月で、振り出しの名古屋へ。東山動物園のすぐそばに、三年住む。動物園の定期券を買って、毎日通園。息子はここで歩けるようになる。まるで動物の親子。入り口にある駐車場のおじさんに、

「お孫さんじゃないよね？」

と言われてしまう。

「失礼な、長男よ！」

現在の尾張旭市に来て二十数年。娘二人は結婚し、長男は浜松で大学生活をいつまでもエンジョイしている。

長女が、週に三日仕事に出るため、三歳と一歳の孫（男の子）の子守に、片道十五キロの道を、四十五分かけて原付で通っている。若い女性が仕事を続けるためにはいろいろ問題がある。彼女が私を必要としているかぎり、使命感に燃えて、がんばらなくっちゃと思っている。

野球と関わり続けて

五十二回生　玉川　寿

名古屋に来て一年四か月。出向先の仕事は、今までに経験したことも無いリテール部門。しかも名古屋は全国一の激戦区。三拍子も四拍子も揃った環境？のおかげで毎日忙しく駆け回っている。勤め先は繁華街・錦のど真ん中だが今だに方向感覚ゼロ。むしろ名古屋周辺に精通し、走った距離は五万キロを優に越えた。土佐高を皮切りに、大学、社会人と十四年間白球に明け暮れ、引退後、年々縁遠くなっていた野球だが、またこの地で再会することになった。今、勤めている会社は全国大会優勝経験を持つ軟式野球部があり、私はそこのコーチを仰せつかっている。

昨年は軟式野球の最高峰である天皇賜杯が青森で開催されたが、惜しくも準決勝で敗退した。

今年は、故郷高知で五球場を使って開催されることになっている。高知市営・春野・明徳グランド・高知商グランド・東部球場である。四月から県予選がはじまり、勝ち抜けば九月の本大会に出場できる。是非とも勝ち抜いてもらいたいと願っている。

こんな生活だから家族には大変申し訳なく思っている。帰りはいつも深夜。日曜、祭日もほとんど休めない状況でついには子供から、

「また会いに来てね」

と見送られる始末。たまの休みに出かけた所は、犬山モンキーパーク、長島スパーランド、知多半島の三ヶ所のみ。（どうも母親と子供達はあちらこちら行っている様子）

名古屋での生活は、まだ当分続きそうな気配である。

われらわかしゃち

水道雑感

四十四回生　山崎　博司

早いもので私が〈巨大なる田舎〉名古屋に住むようになってから三十年になります。今だに名古屋の体質に馴染めないところもあります。

平々凡々と過ごしているうちに、人生に疲れた中年世代と相成り、時代の流れや社会の変化と自分の思考の進歩の落差を感じる昨今、次の寅年が到来すると、〈還暦〉イコール〈定年退職〉イコール待望の〈毎日が日曜日〉かと思うと、時の流れの早さを痛感させられます。

〈電気、ガス、水道完備〉現代の都市生活では、当たり前で、これらは必要不可欠の存在となっていますが、ご存じのとおり、電気、ガス事業は民営で、水道事業は市町村が経営しています。

一般行政と異なり、水道事業は、使用者から水道料金を頂載して、独立採算制を原則として運営されており、役所のなかでも地味な〈堅気の企業〉です。

水道の原料は、無論〈天から貰い水〉の水なのですが、各市町村の事情により、地下水、河川水などを水源として利用しています。

地下水に恵まれている地域や、河川の自流を取水できる水利権を有している名古屋市などは、比較的渇水に強いのですが、ダムから放流する水を取水している場合は、長期間降雨が無いと、ダム湖が枯渇するという深刻な事態となってしまいます。

〈高が水、されど水〉、平生は気持ち良く使っていただければ結構ですが、その節はご協力を。

鮮度が一番 土佐の初鰹

五十一回生　市川　尚孝

名古屋に転勤になって早七年。親類はおろか学生時代の友人も皆無に近い状態で、私も家内（五十二回生市川真智子）も、文化の違いにずいぶんとまどいました。

バブルの絶頂期に中京地区に初めて進出し、従業員も当社の各地からの寄り合い所帯でスタートした《祢保希（ねほけ）》ですが、その中でも名古屋に永住する決心をした者も何名かおります。

それほどに、馴染めばこれ以上住みよい所はない、名古屋は不思議な所です。

さて、事務局からの依頼である〈高知と名古屋の食文化・酒の飲み方の違い〉という趣旨に話を戻します。

高知の方は、なにかあったらすぐ〈お客〉をし、一次会が終わると〈もう一軒〉という〈しわい〉飲み方が多いですが、名古屋の方は、冠婚葬祭等節目の集まりがないと皆で杯を酌み交わすことが少なく、返杯という習慣もなく、それぞれが自分のペースで飲み、二時間ほどたつとぱっとお開きになります。

共通点はというと〈高知時間〉・〈名古屋時間〉と言われるように、集合時間に遅れることをあまり気にしないような点だと思われます。

かつてない不況のいま、こんなに狭い日本の、北からも南からも、都会人でも田舎者でも、全国で一番集まりやすい名古屋のこと。あまり肩肘張らずに、みんなでロマンや昔話に花を咲かせ、馬鹿を言いながら、『和季逢々』（わき・あい・あい＝祢保希のかわら版の名）とやってみませんか。

名古屋パルコ八階祢保希でお待ちしております。

ゆかり探訪

一豊は生きている

三十七回生　南　毅一

〈土佐藩祖・山内一豊公を研究している団体が名古屋の近くにあるらしい〉こんな耳よりな情報をキャッチして、探訪チームが動いた。

桜の蕾も固い三月のこと、《一豊顕彰会》会長の川井喜雄さん（愛知県葉栗郡木曽川町黒田）の、お宅兼お店にお伺いした。

「なにもない町なので、唯一有名な一豊公の出身地として町のPRと活性化を図るのがネライで、研究しています」

ナナナんと、一豊公の生まれは、木曽川町だったのか。

「エエ、ちゃんと高知へ行って調べました。山内家史料・一豊公紀に書かれています」

なるほど、〈尾州羽栗（いまは葉栗）郡黒田村に生まれる〉とある。

だけんどしかし、土佐人の私は知らない。土佐高で習ってない。習ってないことは知らない。しごく当然である。

「ハハハ、一豊は進駐軍でしたから、もともとの土佐人にあまり、良く思われてないのでは……」

私の目の玉を見ながら、川井さんは言う。私はそのもともとの土佐人の子孫かどうかも自覚がない。インタビューの前には、ちょっと調べてこんとイカンチヤと思った。

「一豊が十三歳まで暮らしたお城の跡へご案内します」

アチャ……、山登りか。足の弱くなりつつある五十歳オヤジの私には、ノーサンキュー的好意であったが、ついていった。意外や店から歩いてたったの三分。小学校の校庭名鉄電車の線路際にそれはあった。《お城》イコール《高知城》イコール《山の上》しか知らない田舎者を恥じる。

「この小学校あたりが黒田城でした。一豊の父盛豊は、隣町の岩倉の織田家の家老で、この城の城主でした。一豊はここで育ったのです」

時代は変わっても、この自然と、人間関係、人の感情は今もむかしも変わらない。この地で一豊公は、三歳上の兄と仲良くチャンバラごっこや武道に励んだことだろう。

小学校の校庭には、そんな一豊公もどきの小学生たちが元気に走りまわっていた。

川井喜雄さんを中心とした《一豊顕彰会》の活動はつぎのとおり。

★会報の発行（毎月一回）

★毎年八月、第一土・日の、木曽川町祭りでの一豊公パレード（青年部主催）の後援

★一豊・お千代サミットへの参加（これは、一豊公ゆかりの九市町村が、毎年持ち回りで開くものです）

★木曽川町民ミュージカルの『行け一豊くん』開演の協力

★銅像建立の推進運動

《一豊顕彰会》会員は、町民の方々を中心に百二十人で構成。なお会員を募集中。お問い合わせは川井会長（TEL 0586・86・2806）

編集後記　なごや・ん？

東海支部総会は1998年5月16日。その案内状を出すときに、『わかしゃち』3号も送るときに、編集を急げということで、花見にも行かずにがんばる。間に合うか。

原稿を出していただくときに、パソコンやワープロのフロッピーでお願いできれば幸いです。MS・DOSで初期化してください。印字したものを添えてください。

伝言板への投稿もお待ちしています。（内田　順子）